

くり付けた』と斯ういふ噂が立ち始めた、これを聞いた太兵衛は今更身慄ひして其の晩から俄に佛壇の掃除をして御燈明をあげた、無論それは村の人にも知らない、處が丁度お絹があはれな最期を遂げてから五日ばかり経つてからの或夜、宵の間から吹き荒れてゐた凧もバツタリ止んで冷たい半輪の月影も落ち掛けてゐる、夜半も過ぎて更々と過ぎ行く今は丑滿刻、寂しい田舎町は死んだやうに川瀬の音さへ聞えない、思つてもゾーツとする。

太兵衛の一家は深い夢路を辿つてゐた、例のお神は何やら聲がするやうに思つたのでフツと眼を覺ますと添臥してゐる亭主の太兵衛がさも苦しうに『お絹さん、勘忍してくれ、悪るかつた、ア、儂ぢや儂ぢや、其二圓は儂が盗んだ、悪るかつたアア苦しい——勘忍してくれ——ウ、ンウウン……』といつてゐるのだ、お神は吃驚仰天、さては村の評判の通り亭主が盗んだのかと思ふと今更怖しくなり大聲に亭主を呼び起して見ると全身汗ビツジョリそれから夫婦は久しく経つて漸く眠らうとする

と太兵衛は又魔される、お神はもう寝る處かビリ／＼慄へてゐるとこは抑も如何に枕頭に細ツそりと點してあつた豆洋燈の火が忽ちバツと明るくなつた、怖いながらにお神はソツと覗いてゐると風もないのに火は消えて四邊は眞暗闇、その闇の中に浮彫りの様な人の影こそ城山の朝露と失せた女食の幽霊！

斯うして太兵衛は毎夜假眠もしない、ウト／＼と仕掛けたと思ふとすぐお絹が出て来る、そして瞬く間に太兵衛は骨と皮とに瘦せ細つた、その上毎夜城山の松の邊りでお絹の悲しい聲が聞けると聞いては太兵衛はもう生きざる心地もしない、すると丁度十日目の朝、枯木の様になつた太兵衛は其の筋に拘引されたが、それはいふまでもない某方の例の二圓を竊取した一件なので太兵衛は間もなく罪に落された、どそれから城山のお絹の幽霊も其の儘出なくなつて、村は元の静けさに返つた、けれど其の後その一家には不祥事が打續いて今は影もなく斷絶して仕舞つた、女乞食の恨みだらうと人々はいつて居る。

▲破障子

丹波の八上村に長谷川九兵衛といふ百姓があつた、女房のお松との間に今年六歳になる鐵治といふ可愛のがあつて其の外には九兵衛の老父と家内は四人限りの水入らずで可成裕福に暮してゐた、が唯お松は生來身體が弱くつて鐵治を産んでからは野良仕事なども碌すつぽ出来なかつた、ブラ／＼して其の日を送つてゐたがどうも工合はだん／＼と悪くなつて行くらしい、家の者は心配しながらも其の儘にしてゐた處が或晩不意にお松が苦しみ出したので早速醫者を呼んで診せて見ると何のことはない、それは肺結核だつた、家人は今更の様に驚いたがもう仕様がな、其處でお松を何處へ出養生させることにして恰好な處を捜してゐると、丁度二里ばかり隔てた村に三十位の寡婦一人の家があつて其の離房を借ることにして早速連れて行つた

お松は其所の六疊の間に寝て雇婆さんが一人附いてゐた、亭主の九兵衛は晝の仕事が済むと近くもない道を毎日々々見舞に來てゐた。それが一筒月位も経つと九兵衛は夜が遅くなつたりすると其所へ泊つて行つた、或晩お松がフツと目を覺ませると傍に寝てゐた筈の九兵衛がゐないのでチツと窺ふやうに四邊を見ると母家の方でボシヤ／＼と話す聲が聞える、病氣の故で神經の過敏なお松はすぐハツと思ふと矢も楯も堪らない、衰弱し切つて今は起居も儘ならぬ身體を漸く四つ這ひになつてソツと母家の縁側まで出て行つて障子の隙間から覗いて見るとお、松は其の儘ウーンと逆上して仕舞つた、それも其の筈毎夜々々の遠い道を見舞に來てくれる世にもいとしい夫と思ひきや竊に寢床を抜出して、この家の寡婦と二人が一つ衾にいちや／＼といつてゐるのであつた、其處ことゝは知らない此方の九兵衛はさんざ樂んだ揚句、見附けられない中に離房へ歸らうと縁側へ出るとパツタリ蹉跌いた拍子に庭へ轉び出す、驚いたがさりとて九兵衛はこの場合聲を

發てる譯にも行かず、漸く縁側へ這ひ上つてよく見ると女房のお松！げわつと驚いて大聲を出したので寡婦と雇婆は早速起きて来た、あはれお松は蒼白い顔に頭髪振亂し齒を喰ひ縛つて早や氷のやうになつてゐるのであつた。

九兵衛は其の日の暮方から人を雇つて女房に死骸を戸板に載せそれを擔がせ自分も提燈を持つて寂しい山道を我が村へ急いだ、少時行く中に日はズンボリと暮れて腸も凍る様な烈しい風の中に五日月が寒く山の端に懸つて木兎の聲が月の面に立つた凄いやうな木立の裡から途切れ〜に聞て来る、三人は物もいはず黙つて、スタ〜と急いでゐると一頻り風が道端の松に當つて二つの提燈の汀が同時に消えた、九兵衛はチエツと舌打しながらヤツと點火たと思ふとヒューツと風が来て消えて仕舞つた、オヤといつて漸く又點けたと思ふとフツと消るる、月は隠れて四邊は闇に風が魔のやうに叫んでゐる。

提燈はさうして點けても〜消える、九兵衛は少々癢に觸つて道の灰明るいのを便

りに緩い阪路をヨチ〜と登つてゐると俄に擔いてゐる戸板が何ともいへない程重くなつて、後を擔いてゐた人足は堪へ限れずワーツといつたと思ふと戸板をドスンと落した、九兵衛は『オイどうした』と振り返つて見ると人足は己に腰を抜かして、『お助け〜』と顛へてゐる、根が憶病な九兵衛はそれを見るときギョツとして、お松の死骸も其の儘、一目散に駆け出して漸く自分の村へ歸つて来て斯々だと話すと『ソリヤ大變だ』といふので、村の連中大勢がその戸板を打ちやらかした處へ来て見ると愈大變、戸板はあるがお松の死體は影もない、九兵衛の家では仕方なしに空葬禮を出した。

寡婦は其の晩から一人寂しく寝た、建附けの悪い戸や障子がガタ〜と鳴つてゐる物音にどうしても寝付かれず、此塵晩に九兵衛が来てくれ、ばナと思ひながらウト〜してゐると誰やらトン〜と表戸を叩く者がある、寡婦は『九兵衛さんかい』といふと『オ、九兵衛だよ、早く開けてくれ』と嬉しい聲に寡婦はイソ〜として表

戸を開けると可笑しい、戸外には人の影も見えず寒い月が皎々と輝つてゐる、寡婦はゾツとして戸を締め自分の寢床へ入ると間もなく『オイ〜』と呼ぶ聲は九兵衛だ、寡婦は驚いて『氣味の悪い、九兵衛さん何處にゐるの』といつてヒヨイと縁の破障子を見ると九兵衛にはあらで頭髮振亂した瘦せた女が映つてゐる『アレお松さん!』といふなり寡婦は頭から蒲團を引被つて念佛の百萬遍、早う夜が明ければよいのにと思つてゐると俄に寡婦の蒲團の上から誰やら馬乗りになつて息も詰まらばかりに押へる、寡婦は其の夜中を苦しみ明かして、翌日は早速離房を調べて見たが更に何も無い、すると其の夜は又もお松の幽霊が今度は眞暗い天井から息も絶えさうな泣聲を出す、と思ふて忽ち激しい物音の中に今にも天井が墜ちさうなので、我を忘れて逃げ出さうとしたが手も足も動かない、此處調子で毎夜々々苦しめられた寡婦は見る見るゲツツリと痩せ衰へ、いろ〜養生をして見たが何の甲斐もあらはこそ、もの、半月とも過たない中に死んで仕舞つた。

九兵衛の方はどうかといふと其の後別段それなこともなかつたが例の寡婦が死んでから二日目九兵衛と一緒に寝てゐた筈の鐵治が見えない、老父と二人は大騒ぎをして其所中を捜し廻つても判らず仕方なしに我が家へ歸つて見ると何のことはない鐵治は仇氣ない顔をして寝てゐる、其の夜は其儘で濟んだが驚いた、明くる晩から其時刻になると鐵治は必度何所やら戸外へ出て行つて間もなく歸つて来る、九兵衛は『何處へ行くんだ』と尋ねて見ても鐵治は『お母が呼びに来る』といつてゐる、不思議なこともあるもんだと思つてゐると五六日経つた夜半、何時ものやうに鐵治は出て行つたが到底それツ切り歸つて来なかつた、九兵衛と老父は狂人のやうになつたが今更何うしやうもない、其の中に九兵衛は十二月の末の方、家の屋根修繕の時に高い所から迂り落ちて生命は助かつたが生れも付かぬ不具となり間もなく死んで仕舞つた。

▲ 緋縮緬

淡路津名郡のさる村に三郎兵衛といつて中々の舊家がある、時は明治のまだ十年頃のこと、近村からお谷といふ可愛らしい女中が来てゐた、其の年の暮も押詰つた時分お谷は主家の春着を縫つてゐた、有る家のことだから随分立派な物があると其處は小娘心の淺猿しくも其の澤山な中から緋縮緬の小布をソツと盗んだ、が元來が至つて小心な女だから取るはずのもの、ハラ／＼してゐる矢先、口の八釜しい三郎兵衛の女房に見附けられて、ハツと思つたが已に遅い、忽ち女房のために數多の奉公人の前で恥かしめられたのである、お谷はもう立つてもゐても居られない其の一日泣暮らした揚句が夕方寒い風の中を何處ともなく出て行つた、主家でもそれと氣が附いて大捜しをするとお谷は村を離れた山池に身を投げて死んでゐた、それが丁

度元日の朝である、兎に角親の家へも知らしてやると母親は狂人のやうになつて飛んで来て、娘の死骸に取絶り、泣き口説きながら其處は親心のアノ一枚の緋縮緬さへなければ斯ることもないものと思ふと矢も楯も堪らず『慥麼大家でありながらあれ位の物を遣つてくれても驚も烏も笑ふまいものを……お谷屹度この憎みを晴らせよ』といふと同時に不思議やお谷は口からドロドロと血汐を吐いてそれが庭石に流れた、斯くて葬式を済ませると母親も亦間もなく狂ひ死にをした。所が一方の三郎兵衛の家ではお谷の事あつて以來一家は殆ど間斷なしの不祥事續きで三郎兵衛は五年と経たぬ中に死んだのを始めに、三人の子供は二人まで亡くなり残つた一人は盲目、今も生きてゐるが數多の資産はもの、十年もならない間に一文残らずとなつて仕舞つた、それが不思議に死人といへば必ず正月の元日なのである人々は皆お谷母子の怨恨だといつてゐた。當時の家土藏は己に悉く潰れて今日では總て建ち變つてゐるが彼のお谷の死骸の口

から吐いた血染の庭石は今も残つてゐる、然もそれが洗つてもどうしても取れないといふ、お谷の身投げした池はそれから誰いふとなくお谷池と呼んでゐる。

▲熱心な信者

五年前私は京都の或私塾に學んでゐた、丁度今時分の暑中休暇で郷里の津山へ歸つて再び上京する途中、二三日暇があつたので中山手通に住んでゐた友人を訪ねて二日許り逗留してゐた時である、散歩に出て脇濱の敏馬神社の前へ來掛ると一杯に人群りがしてワイ／＼いつてゐる、何だらうと思つて人垣の後から覗いて見ると、グツスリと煉瓦を積み込んだ荷車の傍に、生れて一年位の犢牛が苦しげな息遣ひをしながらベツタリとヘタばつてゐる、それを二十五六とも見ゆる印禰天の男が破靴の足で蹴るかと思ふと持つてゐる竹片で瘦せた脊をビシ／＼としばく其の度に犢牛

は悲鳴を揚げて身體を藻掻く、私は到底も凝と見れ居れなかつた、聞いて見るとこの炎熱に哀れな犢牛は彼の煉瓦の荷車を輓いて來たのだが是處まで來ると遂に昏倒したのであつた。

それでも鬼の様な残酷な彼の法被男は例の竹片で『これでもか／＼』と殴り續ける見給へ脊といはず股といはず血はフツフツと吹き出してゐるのだ、所がそれを見てゐる群集が誰一人其の暴虐者の手を止めやうとする者もない、却て鬼の如き男が殴る度に犢牛の腔門から搾り出す様に流れ出る糞を面白さうに見てゐるのであつた、中には手を拍つてワイ／＼いつてゐる者さへある。私は見るに見兼ねて『君ッ、餘り残酷だよ、君が幾何撲つたとしてこの牛はもう動けないのだから仕様がないなやないか、幾何ものをいはないからといつて其麼可哀さうなことがあるもんか』と今しも彼の男が暴虐の竹片を打下さうとするのを止めやうとすると男は『何ッ』と振向くなり私を睨め附けた、其驚の如き眼はこの肉にも神の温かい血があるとは思へな

い位『お前は何かやい、要らんお世話だ』と宛で其の竹片で私をも殴り付けやうかといふ權幕だ、私も氣が立つてゐるから少時言争ひアハヤ腕力にもならうとしたから残念ながら手を引いた、さうして歸つて來た。

私は其處とは少時するともう綺麗に忘れてゐた、丁度それから四年経つた昨年、愈々神戸に永住する積りで神戸へ來て二箇月ばかりも経てからのことである、昔合の或教會へ行つてゐると毎夜々々熱心に通つて來る何處か斯う病人らしい三十前後の男があつた、顔を見合すので會釋位はしてゐるが風體からがどうも普通の學生や何んかではないらしい、而し熱心なこと、いつたらない、で私は或日其所の牧師に彼の男の信者になつた動機を訊ねた、さうして私はその答へを聞いて今更の如く驚いた、其の男は實に四年前敏馬神社の前で犢牛を撲り殺した残酷な男であつた、而も彼の哀れな牛が夜となく晝なく、男に附纏つて彼は遂に狂人になつた、それをこの牧師が助けて今では晝は勞働し夜は斯うして熱心に祈つてゐるのであつた。

何といふ奇遇だらう、私はそれ以來忽ち其男と心安くなつて今日でも親しく交際してゐる、彼は現に今北本町に住んでゐる。

▲白木の位牌

詫しい冬の日が嵐のやうな北風の中に暮れて、眞黒い嫌な形をした雲が夢のやうな寂しい夕映の空を一人で夢野の墓地に近いあたりはもう往き來の人もなかつた、ボツ／＼と散らばつてゐる何處の家でも恐ろしいもの、やうにヒツタリと格子戸を締めて、灯明さねも見えない、唯熊野神社（谷に權現様と村の人々はいつてゐる）の孤燈がその物凄いやうな夕闇の中にチロリ／＼と光つてゐる、家々ではもう寒さに身を顫はせながら夕餉の膳にでも向つてゐる時分——明治四十二年も押詰つた十二月の十八日の夜である。

……首釣りだ、誰れが、お澄さんだ——突き切るやうな聲が突如として闇を劈いて聞えたかと思ふと續いてバタ／＼と人の駆け出す音がする、自分は丁度夕飯を食つてゐた時で、忽ち箸と茶碗をお膳の上へ投げ出して、戸外へ飛び出した、さうして人々の迹へ追つて走つて行くと唯ある家の暗い門口の處に早や十四五人が塊つて、皆んな怖いもの、様に低聲で話しながら家内を覗き込んでゐる、お澄さんは矢張り首を釣つてゐるのであつた、お澄さんといふのはこの家の女房である、亭主の吉藏は可成な大工で、その日も何時ものやうに仕事を済ませて今し方寒い風の中を歸つて來るとこの暗いのにまだ灯もどもつてゐない、吉藏は『お澄今歸つた、開けてくれ』といつたが家内は矢張り唯眞暗いばかりで聞としてゐる、留守か知らと思ひながら今度はその戸を開けやうとすると内方からシツカと掛金がしてある、仕方がないから吉藏は裏手へ廻つて板塀を乗り越えて、手搜りにヤツとの事で洋燈を點けたが果して細君はゐない、さうして別段夕餉の拵へもしてない、吉藏はブツ／＼と愚痴

しなから、ヒヨイと何氣なく土間を見ると、この間買つたお澄の直穿きがチャンと置いてある、吉藏は其の時妙だナと思つたが豈可其麼こと、は氣が付かないから、それから自分で七輪に火を熾して茶湯を懸けて置いて裏口の便所へ入ると、こは如何に亭主の木綿紋りの兵兒帯を棟木に引掛けて、お澄は眞暗い雪隠の中で首を釣つてゐるのだ。

お澄はあはれな運命の女であつた、まだ頑是ない七歳の時、妙な家庭の不和から父親は家出をして仕舞つた、それでお澄は父なし子のやうな工合になつて、母の手一つで育てられ丁度二十歳の春、去る所へ嫁つて間もなく文雄といふ可愛らしい子供を産んだが、不仕合はせなお澄はその子が四歳の時に亭主に死別れて、寂しい幾月かを文雄を抱へて涙の中に暮してゐると、可い鹽梅に世話する人があつて今の亭主と一緒になつた、お澄は連れ子の文雄のことを心配したが吉藏は商賣柄にも似せない温順しい男で、文雄を宛で自分の實子のやうに可愛がり随つて夫婦仲も睦じく、

吉藏の晩酌の時に何うかするとお澄は三味綿を弾いて可い聲で唄つたり、櫻の時分には子供を連れて須磐へも行けば文雄の好きな活動寫眞は夫婦が代りばんこに新聞地へ連れて行つた、その時分お澄の母親は古湊通りの何處かに住んでゐて、お澄はその母親に孝養するのをこの上ない楽しみにしてゐた、其塵譯でお澄のためにはその頃こそ全く春のやうな長閑な嬉しい時であつた、處が可いことばかりはないもので寒い北風の吹き初めた十一月の末、お澄のいとしいいとしい母親は突然死んだのである、孝心深いお澄は日夜悲嘆の涙に暮れて、食事も満足に咽喉を通らないといふ有様で吉藏はそれを親切に慰めてゐたが拙い運命は何處までお澄を連れて行くのであらう、唯つた一人の文雄はその月の十二日にチヨツとした風邪が原因で新しい祖母さんの後を追つたのである。

唯つた一人の母と子供まで死なしてお澄は宛で狂人のやうになつた、吉藏はいふまでもない近所の女房連までがいろ／＼と慰めて見たが可憫さうにお澄はどうかする

ともう變な事を口走つたりするやうになつた、今日は丁度その一週間目である、吉藏は二合のお仕着せに晝の疲れを忘れやうと思ひながら寒い風の中を急いで歸つて來るとお澄はこの始末である、火鉢の抽斗を開けて見ると一通の長い長い書置きは覺束ない筆の運びにも涙の痕が綿々として残つてゐた、吉藏は其の手紙を顔に當て、男泣きに泣いた、さうしてお澄は母や子供の踪跡を追うて夢野墓地の果敢ない一片の煙となつた。

自分は丁度そのお澄の一七日の晩、阿母と一緒に吉藏の家へ行つて見ると、寂しい佛壇の灯影に新佛のお澄の位牌がウツスリと白い、さうしてその前にはあはれな亭主の吉藏と五十ばかりの知らない人が黙つて坐つてゐた、でその人にも會釋をして少時すると酒が出た、自分も少し許り飲んだりしてゐると、始めてその老人はお澄の生別れたといふ實父であることが判つたが生死さへ判らなかつたこの父親が二十年後の今日娘の位牌の前に坐つたに就いては世にも不思議の一場の哀れな物語がある

お澄の父は前にいつたやうな譯合から可愛妻子に生別れて丁度今から二十年前、腹立紛れに北海道に飛出してそれ切りもう一度の音信もしなかつた、さうして若い元氣に委して仕度放題に暮してゐたが何時まで人間は若くない、その中にだんだん年は取る、腕は鈍る、さうしてもう到底も若い人々と一緒に働くことが出来なくなつた、すると今までは時折位に思ひ出してゐた神戸の妻子が今更のやうに戀しくなつて、どうかすると寂しい涙が瘦せた頬を流れた、其麼譯でこの一二年彼は唯もう妻子のことばかり思ひ續けてゐたが或日不圖、娘のお澄は神戸の夢野に世帯を持つてゐるといふ風の便りを何處からともなしに聞いたので、今はもう矢も楯も堪らなかつたで、早速北海道を發つて老後の思出に、せめて善光寺様へ詣つてと思つて丁度冬の寒い日、彼は善光寺からトボ〜と田舎道を西の方へ歩いてゐると彼方から二人の女が五つ六つばかりの子供の手を引いて來るので、何氣なくその二人を見ると如何にも見覚えのある筈その女こそ二十年前に別れた女房と娘のお澄なのである、

ハテ不思議なこともあるもんだ、神戸にゐると聞いたのはツイこの間なのに、今頃善光寺へ來るとは若しや人違ひぢやあるまいかと思つて、よく〜見ると片時さへ忘れられない可愛妻と娘！

『……お澄！』と呼ぼうとしたが何うしたのか口が利けない、それですぐ手眞似をしたが女房と娘は見向きもせず忽ちズン〜と行き過ぎて仕舞つた、彼は有切りの聲を張り揚げて女房と娘の名を呼ぶと、三人はフツと思ひ出したやうに振り向いて、手を合はして拜む眞似をするのだ、彼は驚いて追駈けやうとしたが早やその時はもう三人の姿は夕闇の中に掻き消されて仕舞つた。

汽車に乗るにもそれ程十分な金はなし、彼は兎に角急げるだけ急いで、其の晩は或る小さい村の旅籠に泊つた、身體は綿のやうに疲れてゐたが神経は昂奮して到底も寝付かれない、思つても〜今日あのような處で女房や娘に逢つたのが譯が判らない或は母子ともに死んでゐるのではなからうかと思ふと心は掻き撈られるやうに苦し

い、遺瀨ない涙は止め度もなく流れた、彼はさうして冷たい寢床の中に輾轉しながら、今はもう夜半も過ぎて一時の時計がチーンと鳴るのを聞いて間もなく彼は氣疲れの果に何時とはなしにウト／＼とした、と思ふと誰やら枕元へ来て頻に自分の名を呼ぶ者がある、ハツと思つて驚いて目を覺ますと、ア、今日夕方に逢つた懐かしい女房と娘が一人の子供を連れて其所に坐つてゐる、姿も今日見た白い巡禮姿！此方は一時に冷水でも浴せられたやうにゾツとして、少時は言葉も出なかつたが娘のお澄は父親の起きたのを見ると、ホロ／＼と涙を零しながら「お父さん私はお母さんや文雄の跡を追うて死なねばならず今日首を釣つて死にました、せめて生きてゐて一度お父さんにお目に見えたいかと思つてゐると今日あの善光寺様の側で逢つたので、私は何様に嬉しかつたか知れませんが、それにお父さんは言葉も掛けて下さらないで……」といふその聲は可愛娘の聲、彼は目もパツちりと開いてゐる、耳もシツカリと聞える、それに「オ、お澄か」と何麼

にいはうとしても口から出ない、ア、自分程因果な者はない、折角斯うして女房や娘や孫に逢ひながら言葉一ついへないとは……ア、情ない、口惜しいと、我知らず寢床の中で藻掻き苦しみながらソツと見ると、何時の間にかやらもう女房も娘も姿は見えないのである、さては愈妻子はもうこの世にないのか、それではいッそこの身も一思ひに、自殺でもしやうかと思つたがせめて神戸まで歸つて、それからの上のことにしやうと漸く思ひ直して、長い旅路を十里に一日八里に一日と、詫しい日を暮らしながら歸つて来たが、それから後といふものは何處の旅館で泊つても、毎晩一時か二時といふ時刻になると、キツと女房と娘と孫の三人の白い順禮姿が現れて、彼の疲れた切ない胸をさんざ苦しめるのである、けれども何時だつて一口さへ利けない、彼はもう長い間のこのいろ／＼な苦痛に我ながら、生きてゐるのか死んでゐるのか判らない位弱つてゐた……さうして彼は今尋ね／＼して漸く斯うして歸つて来たのである。

嗚呼長い苦しい旅路も仇であつた、歸つて見るとこの始末、女房は死に娘は死んでゐるのだ、思ひ返して見ると善光寺の此方で女房や娘に逢つた日はお澄が丁度あの雪隠で首を釣つた而もその時刻であつた……あ、斯麼悲しい目に逢ふのも皆んな自分が悪いのですといふなり彼の老人は其の場に泣き伏した。

三つの白い位牌はジツとその姿を噴めてゐた、自分は眼を閉つて身體を慄はせた。

▲ビ
ー
ル

四十四年七月三十一日、午後二時、前中謙藏君來訪せらる、久し振りに

飲みて午後四時歸る……

これは大阪の船場で立派に事務所を開いてゐる辯護士○○君の日記の一節である、その文中の前中といふのは○○君のまだ若い時代盛んに遊び廻はつてゐた時分から

の親友で、お互に年と共に今は久しく別れてゐた、處がその頃丁度前中にお訛へ向きの仕事が見附かつたので、其處は友達思ひの○○君だから、早速前中の兄なる人に同人の現住所を問合せにやつたけれども何うしたものか一向返事が來ない、○○君は、それから二三度も手紙を出した。

するとこの日記にある三十一日のその時刻に前中がヒョククリとやつて來た『オヤ珍らしいぢやないか、丁度この頃君のことを噂してゐたのだ、さア上り給へ』といつた調子で、○○君は直に前中を坐敷へ通して先づ女中に茶など出させた、その時氣が附いて見ると前中は成程年が寄つてゐるばかりでなく、身體も痩せ顔色なども極めて悪くなつて到底も當年の昂々たる意氣も面影もない『僕も年を取つたが君も更けたね』ウンその後には病神に祟られ通して大に弱つてゐるんだよ』さうだらう顔色も悪いね、面しまア久し振りだ、大に飲まうぢやないか』といつた處が前中は淋しい笑顏をして『御厚意は有難いが薩張り飲けないんだよ』といふから○○君は少時

して淡泊とビールなどを出した、前中はそれを静かに飲みながら「何うも弱つたよ」といふのを冒頭に、初めに肺炎に罹り、中途で肋膜炎になり今はもう肺結核で入院してゐる、處が自宅には御存知の通り子供が二人まである、女房はあの性質で働くことも出来ず大に困難してゐるのだから、何處一つ可い所へ周旋を頼むとある、其處で〇〇君は例の仕事のことを話して兎に角履歴書を越させることにした、すると前中はその時ゲビリとビールを一口飲んで「君、世中には矢張り幽霊といふものがあるよ」と取つても付かない話題に〇〇君は妙なことをいふもんだと思ひながら誰「さうかなア」といつて笑つた、處が前中は頗る眞面目で、今度は神戸に可い鍼按摩がある、その按摩の鍼一本で僕の肺でさへ一週間に癒つたといふから、〇〇君はその名按摩の名を聞くと忘れたといふ、それから君の住所はと尋ねると神戸の東尻池で某方に同居してゐるといふ、可笑しいぢやないか、前中が自分の同居してゐる家の名を知らないといふのだ、〇〇君もどうも變な氣がするので「君どうかしてゐ

やしないか」といつても前中は「戯談ぢやないよ」と笑つてゐる、〇〇君は丁度東尻池のことをよく知つてゐたもんだから、前中に尋ねて見ると前中の答へは全くいゝもいゝも、一向譯が判らない、その中に前中は大分酔つて來た、さうしてチンチンと四時が鳴ると間もなく前中は「どうも失敬した、又來るよ、それから履歴書は歸神してからすぐ送るから」といつて立ち上つた。

前中は愈歸るといつて玄關の方へ出た、〇〇君は事務室の方からすぐに表庭の方へ下ると玄關ではカタ〜と下駄の音がしてゐた、で〇〇君は玄關へ來て見ると前中はゐない、或は便所へでも行つたのだらうと思つて〇〇君は彼此十五分ばかりも待つてゐたが一向出て來ないので「オイ前中君」と便所の外から聲を掛けた、それでも何の返事もない、其所で〇〇君は便所の戸を開けて見ると驚ろいた、前中の影もない、それでは矢張りあの儘歸つたのか知らんと思つて〇〇君は別に氣にも掛けなかつた、さうしてその日の日記に前回のやうなことを書いてゐた。

するとこの事があつてから丁度二日目に前中の兄なる人から手紙が来た、○○君は何氣なく開いて見ると、さア驚くまいことか、その文の大意は度々舎弟の所在に就きお尋ねに預つたが自分は長らく旅行不在中甚だ失禮をした、而し愚弟謙藏は實は昨年七月三十一日肺疾にて死亡し、恰も本日はその一週忌に當る、せめて戒名なりとお送りするといつて青雲軒劍道居士といふ佛名が書いてあるのだ、これを読んだ○○君の驚愕は喩ふるにもなして、萬一あの時自分がどうかしてゐたのかも知れないと思つたので早速その時立關に迎へ、茶なども出した女中を呼んで『オイこの間儘に前中君は来たね?』といつた、と女中は如何にも變な顔をしてゐる、する筈だ、○○君は自分で前中と一緒に飲んだり話したりして置きながら、その男が来たかと尋ねるのだから、下女たるものこの場合どう答へてよいか譯が判らない、それから○○君は更に『前中君は足があつたね?』と尋ねた、女中は愈變な顔をして『旦那様御戲談を仰有つて……』と到頭笑つて仕舞つた、處が○○君は頗る眞面

目で『ナニ戲談ぢやないよ』といつてそれからいろ／＼なことを尋ねると、矢張り正真正銘の前中謙藏に違ひない、白い足袋も穿いてゐた、帽子も冠つてゐた、洋傘まで持つてゐた、斯うなると流石の○○君も心中驚き呆れて、實は斯々であれば幽霊だといつたので女中は吃驚仰天、忽ち顔の色を變へて、自分の部屋に逃げ込み、幽霊の来るやうなお家には妾は怖くつて得勤めませんと、早や歸り仕度を始めた。それにしても不思議でならないのは死んだ前中が丁度自分の一週忌に訪ねて来たといふことで、○○君は豪氣な人だがどうもあんまり可い心持ちもせず、間もなく前中の兄に宛て、この次第を一伍一什文通すると先方は先日の手紙を一週忌の當日佛壇の前で書いたのださうで、多分佛の魂が懷舊を感じて出掛けたのだらうといつて来た、何れにしても妙なことがあると○○君は今に驚いてゐる。

▲血汐の飯

攝津武庫郡住吉村に阿彌陀寺といふ淨土宗のお寺がある、其の寺の門前に玉置定吉といふ輪替屋があつた、桶屋の定はんで通つてゐたが家には女房のお玉と其の阿母のお秋婆さんと三人暮しでお玉は始終中弱かつたが生活は氣樂にやつてゐた所がお玉が或日大阪からの歸途に住吉の停留場で電車に跳ねられ強か胸部を打つたが原因で三日ばかり寝ると其の儘果敢なく佛さんになつて仕舞つた、定吉とお秋は氣でも狂うかと思はれる程落膽して、少時のあひだは手仕事など手にも着かなかつた。それ程傷心してゐた定吉がどうしたのか或晩敏馬の或料亭で酒を飲んだのが抑もの始まりで、昨日に變る定吉は忽ち仕様のない放蕩兒となつて仕舞つて、仕事は抛ちらかし、家へは歸つて來ぬといふのだから堪らない、後に残つたお秋は娘には死な

れ定吉にはこの始末、殆ど食ふにも困つていつそ生甲斐のない身を首でも釣つて死なうかと思つた、あれ程眞面目だつた定はん、事を分けていつたら身持ちも直るだらうと時折に歸つて來た時にそれとなくいつて見ると定吉は大の立腹、殴つたり蹴つたり果は出て行かねば殺してやるといふ窘め方にお秋の身體には生傷の絶間もなかつた。

お秋婆さんは愈募る定吉の虐待に堪へ兼ねて遂に或日の夕方定吉が歸つて見るとお秋は箆笥の抽手で首を釣つて死んでゐた、道の定吉もこれには随分驚いたが不思議にそれと同じ時分に定吉は敏馬の情婦に捨てられたのである、定吉は今更の如く夢が覺めて悄悄と歸つて來て、自分で水汲み飯炊きをした、煤けた小洋燈に火を附けて薄暗い其の下に膳を置いて釜の儘の飯の蓋を取ると白い湯氣がモラモラと揚るそれを杓子で茶碗に盛つて今しも箸を執らうとすると飯は紅か血が眞赤な色、驚いて洋燈の心を捻ち上げて釜の中を見ると底の底まで血汐の飯！定吉はギョとしたが

すぐとガツカリと首垂れてジツと考へ込んだ、少時すると定吉は眞蒼な顔をして其儘フツと家を出た、そして其の夜は歸らず翌朝力ない風で歸つて來ると血汐の飯を捨て、新しい米を炊いたが炊き上げて見ると矢張り眞血な血の飯！あまりのこと定吉はアツと叫んで釜も其の儘家を飛出した、近所の人は其塵ごと、は露知らず『定さん開ツ放して用心が悪いせ』といひながら何氣なく入つて行つて見ると釜にはまだ温い血の飯があるので、吃驚して飛出した、門口にも同じく捨て、ある。それから定吉は何處をどうしてゐたのか四五日すると、淺猿しい死骸が住吉の海岸から發見された。

▲轆轤首のお常

轆轤首といつて女の首が飴のやうに延び出すといふ話はいくらもある、さうして首

筋に大きな輪の二條ある女は必度それだといふことも名高いものだが茲にその轆轤首の實例を御覽に入れやう、頃はまた舊幕時代のこと、生野銀山口の銀谷町に其の時分は播磨口といつて御番所があつた、この御番所の役人に松井某といつて可成武術の達者な人がゐたがその松井の家にお常といふ下女が居つた、年の頃は丁度二十三四位で容貌は左程悪くもない、處がこのお常の首に例の大きな輪が二つある、だから人々は的切りろくに違いないといつたが松井の家人は豈可其塵馬鹿なことがあるもんかと思つて其の儘にしてゐたのである。

すると或夜のこと、主人の松井は急に公用が出来て同地の奥銀谷町へ行きその夜も更けた彼此丑滿刻、先生はスタ〜と大急ぎで自分の家の門前まで歸つて來た時何氣なく傍の井戸の井筒の上を見ると何やら白いやうな黒いやうな如何にも變ちきりんなものがふ〜と闇に浮いてゐる、主人も兎に角怪體なものだと思ひながら横手の小笹の蔭に身を忍ばせてチーツ覗ひ見ればそれは女の首！流石にハツと主

人も驚いたが猶仔細に見るとその首は遙か彼方の自宅の天窓から細い尾を曳いてゐる、愈こは妖怪の行爲に相違なしと主人は矢庭に大刀スラリと引抜き唯一刀の下に打斬らんと井筒の側に進み寄れば斯く見たる女の首、その四邊を彼方此方に逃げ廻り如何にしても主人は思ひを達せず大に焦れ込んで今は最後、ヤツと一聲太刀風凄しく斬り下したる甲斐もなく首は早くも逃げ出して遂に元の天窓へ姿を隠して仕舞つた、主人は早速家内を起して家中を大捜し、たけれ共一向何にもないのみか別に變つたらしい風もない、松井も不思議で堪らない、而しあんまり武士の面目でもないから其の儘にしてその夜は寝たのである。

翌朝は何時もの通りに起きて家内一同打揃ひ朝飯を食べたが下女のお常は何時になり蒼白い顔をして妙に打沈んでゐる、で夫人は何うかしたのかと尋ねると實は奥様私は前夜本統に恐ろしい夢を見ました、それは私が門の井戸端で遊んでゐましたら家の旦那様が俄に長い〜お刀を振翳して私を唯一打に斬らうとなさいますので私

は逃げ廻つてヤツとのことで家内へ駆け込み生命だけ助かりました、さうして目が覺めて見ると身體中はビツシヨリの汗でした、生れてから彼麼恐ろしい〜夢はムりませんといふのである、これを聞いた松井の驚きは如何ばかり、世にも奇異なことであるもんだと思つたがそれといつては家人も嫌がらうし、まだ若い身のお常も可憫相だと松井は何喰はぬ顔をしてそれは恐ろしいことだつたらうと笑つて其の場を濟ませ馳て二三日経つてからそれとはいはずお常に暇を出した、其の後お常の轆首の評判は益高くなつて相當な容貌でもありながら嫁に貰うてくれる人もなく、一生獨身で終つた。

▲鹿の瀬の船幽霊

時は去る三十九年のグツと詰つた極月の末つ方、播磨灘一帯は五六日も吹き荒れて

沿岸は到る所何處も同じ不漁が打續いて數多の漁師は何時なぐことかと憂はしげに皆んな心配してゐるとそれから二三日もして風空の静かな冬の海に還つた、而しまだそれは本風ぢやない、底怖ろしい危険が漂つてゐるといふ天候だから萬一を慮つて大抵は出漁を見合せてゐたが是に加古郡本莊村に山根岩吉と悴鹿一といふ漁師がある、その時父子は斯うして外の者が行かない時に出て、い、い、い、い、い、い、いかといふので早速と竊に舟用意をしてその日の夕方から二挺櫓勇ましく漕ぎ出したのである。

さうして來たのが名高い鹿の瀬の礁を西南方へぎつと七八丁ばかりも離れた處だ、父子はすぐと網を下して四番五番とやつて見ると漁れるも、殆ど近來にない大漁昵として居れば本統に凍へ附いて仕舞ふかと思はれる位の寒さの中にも思はぬ多漁に父子は一心不亂になつてゐると簾を掠める北風の中にポツリ、と零れて來た、『オヤ雨だツ』と二人は今更のやうに四邊を見廻すと空には星影失せて眞暗闇の中

に船舷を打つ浪の音が物凄く聞える、何時もならば姿は見えないまでも友船の灯が點々としてゐる處だが今宵ばかりは目に見ゆるものはない、唯仄白いのは夢のやうな波の華！

岩吉は取つて四十幾つ、鹿一とても十八歳の何れも元氣盛りと來てゐるがこの物凄しい光景には我知らず二人もゾツとして齒の根も合はず今まで唄つてゐた船唄の聲も何處へやらあまりの心細さに今一番で歸らうと網の手を急いでゐる鹿一がフト舳の方を見ると何やらボンヤリと現れたものがある、さらでも心も心ならずといふ鹿一はギョツとして眼は寒いだが其處は所謂怖いもの見たしでチーツとよく見ると怖しや、みどりの黒髪振亂した女が凹んだ眼に、キロリと鹿一を白眼んでゐる、これを見るなり鹿一はキヤツと魂切る一聲、岩吉はその聲に驚いて其の場に尻餅を突いたが氣が附いて見ると鹿一は仰向けに船土間に打つ倒れてゐる『オイ鹿公何うした』といつても鹿一は唯『怖い、助けてくれ！』とばかりで身體はガタ／＼慄えて

ゐる、起ろといつても立つ事も何うすることも出来ない、岩吉も今は眠として居れず無茶苦茶に綱だけを引揚げて、一生懸命傍目も振らず我が村をさして歸つて來たが鹿一の顔は土のやうになつてゐる、漸く近所の人々に抱かれて我が家に入つてもまだ『怖い〜』を唸り通じて親父の岩吉は薩張り譯が判らない、處が手を盡くした結果ヤツとその翌くる日何うやら正氣に返つたといふのである、それ以來この界限では忽ち大評判となつて今日でも鹿の瀬の夜漁だけは何麼漁師も嫌がるさうで漁師仲間では昔からよくいふ船幽靈で或は近海の難破船などの水死者の亡靈だらうといつてゐる。

▲血の窓

明治の十四五年頃のこと河内の生駒山の麓の住道村といふ處に沖村辰造といふ小

作百性があつた、年は二十六七でツイ先程お留といふ若い女房を迎へて夫婦仲は所謂水も洩さないといふ睦まじさで、劇しい野良仕事も二人がせつせと働いて貧しい中にも温かく暮してゐたが、その年の夏も過ぎて九月頃から辰造は眼が悪くなり出した、始めの中は何の氣もなくホンの素人療治をしてゐたが到底も癒り處か悪くなるばかりでお留は一方ならず心配した、程近い野崎の觀音様へも野良の暇さへあれば朝となく夜となく詣つては祈願を込めたがそれも甲斐ない夫の眼は日々に重くなつて來た、お留はそれでもどうかして辰造の眼を癒さうと苦しい中から醫者を迎へ薬を買つて養生をさせてゐた。

けれども一向よい目は見えない、もう日目の藥代もお留の細い腕一つでは敵はない其處でお留は奉公でもしやうと思つて或夜病夫に相談して見ると辰造も始めは『其麼にお前に苦勞を掛けては俺は氣が濟まないから』といつて容易に聞かなかつたがさりとてこの後どうして養生をして行く的もない、近所の人々もだんだんと勸めて

辰造も漸く得心し、お留は十一月ももう餘程寒くなつてから或人の世話で愈大阪へ奉公に出ることになつた、主家といふのは東區の座摩の前を北へ入つた西側、今の南の御堂の裏手の塚本藤兵衛といふ古着屋であつた、行くと勿々半期分の給金三圓を前借してお留はそれをすぐ辰造に送つた、さうしてせつせと骨身惜まず正直に働いたから主人の氣受けもよかつた、其處にして其の年も明けた春の或日の朝早くであつた、下肥汲みが來てゐるのでお留は何氣なく貴方は何方だといつて聞いて見ると肥屋は自分と同じ河内の住道在の者でいとしい亭主の辰造も知つてゐるとのこととお留は亭主にでも逢つた程に早や胸を躍らせて『それでは辰造さんはこの頃どうしてゐます病氣は大分よくなりましたか』と聞くと肥屋は『へえ〜病氣はもうスツカリ快くなつてこの間別嬪な嫁さんを貰ひこの頃はえらい元氣ですよ』と事もなげにいつた、お留は思ひも掛けないそれを聞いて驚くまいことか『肥屋さんそれは本統ですか』といつた限りもう後は聲も出ない、見る〜顔色は眞蒼に變つて身體

はブル〜慄へ出した、肥屋はそれを見ると吃驚して匆々歸つて仕舞つた。思ひに思ふ夫の辰造が斯處にまでしてゐる自分をよそに好いた女房と仲睦じく暮らしてゐると聞いてはお留の胸は嫉妬と口惜しさに憐れ揚つた、主家の用事なども手に附く所か早も氣狂ひのやうになつて家中をウロ〜してゐる、見れば顔の色といひ唯ぢやない、家の人々も氣分でも悪いのかといつてもた、『へえ』と答へるばかりで碌すつぽ語もいはない、さうして其の晩の九時頃になると少々氣色が悪うムいますから休ませて下さいといつてお留は其の儘店二階の六畳へ上つて寝た、それから間もなく店も閉めて家人はそれ〜寢床へ入つたのは彼是もう十二時近かつた夜が明けて店の者が起き主人なども床を離れたが氣が附くと家では一等早起きのお留の姿が見えない、どうしたんだらうといつて御寮人さんが店二階へ何氣なく上つて見るとお留は起きて東窓からジツと戶外を覗いてゐる『お留何をしてゐるのや』といつたが振向きもしなければ返辭もしない、で御寮人さんは『お前一體何を見て

ゐるのや』と前へ廻つて見ると返辭をせぬも道理、お留は兩手でシツカと窓の欄干を握り口には黄楊櫛を逆様に咬へ顔色は土のやうになつて死んでゐる、さうして其の窓は一面生々しい血だらけである、一目見るなり御寮人さんはキヤツと其の場に氣絶して仕舞つた物音を主人の藤兵衛が聞附け上つて來るとこの有様、忽ち家中は大騒ぎで、醫者よ薬よといつた揚句御寮人の方はヤツト息を吹返したがお留は己に氷のやうになつてゐる、主人始め家内中は一體何としたことだらうといつて心配してゐる折も折り、百姓風の四五人の男が周章しく古着屋へやつて來て『私共は河内の住道の者でムいませが自宅に奉公して居りますお留さんに急に逢はして貰ひたうムいませ』といふ様子は唯事ではないらしい、主人は斯斯でお留は死んだと答へると百姓は愈顔色を變へて驚いて『實は私共の方も斯斯でムいませ』といつて話すのを聞くと、お留の亭主辰造は今朝の三時頃俄に恐ろしい聲を出したので近所の者が驅附けて見ると無慙や辰造は何者にか其の咽喉笛を喰ひ切られ血に塗れて死んでゐる。

でゐたとのこと、百姓も主人も斯うなつては益事の意外に且驚き且怪しみ、取敢ずお留の死體は其の百姓が受取つて住道へ歸り親類縁者としてない夫婦だから村の人々が寄つて心ばかりの葬式をしてやつた、無論死體は一つの墓に納めてやつたのである。

この評判が忽ち高くなると慄ひ上つて驚いたのは彼の肥汲みの男である、所がこの男がいつた辰造といふのはお留の亭主の辰造ではなくて矢張り自分の村に同名の男があつたので事實をいつた所がそれをお留が亭主と間違へたのだといふことが判つた、而しその肥汲男は間もなく死んだ、それから大阪の塚本の家でも例のお留が獅噛み附いてゐた東窓には夜な夜なお留の物凄く幽霊が現れといふので、白晝でも二階へ上る者もなかつたが、少時すると其の窓は壁にして仕舞つたさうである。

▲四つ池の善八

一人の男が今にも零れて来さうな眞暗がりの夜中、播州飾磨郡荒川村から西へ一里ばかり隔つた蒲田村へと寂しい野道を急いでゐた、その男は同村字井の口の善八といつて強力強膽を以て知られてゐる、丁度その時は村の知人の家に死者が出来て、それを蒲田村の親類へ知らせねばならなかつた、處がこの暗い眞夜半の上に蒲田村へ行くには姫路別院の大きな墓山の麓を通り、化物が出るといつて名高い四つ池堤から蒲田山を越えなければならぬ、で大抵の者は尼込みをしてゐるのを見た善八さても皆んな意氣地のない人ばかりだ、何の三人も五人も出掛ける必要があるものか、見事に乃公一人で行つて来るからと年寄り連中の止めるのも聞かず、この善公にはこの腕があるよと早速簀笠に装束を堅めて飛出したのである。

善八はスタ〜と来る程に早や墓山も通り過ぎて四つ池の堤に掛つた、簀に包んだ腰には山刀を差して右の手をその柄に掛けながら四邊を見廻してゐたが一向化物處かひつそり閑としてゐる、善八は心の中で人の噂なんて全く當にならないものだ、

など、思ひつゝ、その中に池も提も過ぎて早や蒲田峠の絶頂近くなつた、善八はヤレ〜と思つて汗を拭きながら路傍に腰を下して何氣なくフツと目の前の大きな岩を見と、果して化物が出たも出たも一つ目の大坊主がその岩角に腰打ち掛け、善八が其處に居るのも知らない様な風をして頬と大きな煙管でスバ〜やつてゐる、茲だ乃公の本領を示すのはと善八早速自分の煙管を出しツカ〜と大坊主の前へ来り「オイ坊さん、チョット火を貸してくれ」といつて坊主が自分の煙管を差出す手を引掴んで一氣に打ち掛らんとすると早やもう坊主の姿は闇に掻き消れる、善八大にしたり顔でこの乃公の勢ひに恐れて逃げやがつた、態見ると獨語をいひながら一ツ目坊主の掛けてゐたその岩角に腰を下して一服した、さうして少時すると蒲田村へ下り用事も果して自分の井の口村迄歸つて来ると、村の誰彼れが大勢村端れまで迎へに来てゐる、善八は一同を見るより大に天狗鼻を蠢めかし例の峠の一つ目坊主の話をやつた、一同はそれは〜流石は善八さんだ大坊主は何麼だつた、斯麼だから

といふなり、村の人々と思ひきや忽ち一ツ目の大坊主と變じ火のやうな眼玉を剥き出したので、流石の善八もこれには膽を潰しウーンとその場に仰向けに打倒れて氣絶して仕舞つた。

話し變つて此方の井の口村の不幸のあつた家では威らさうなことをいつた善八が、待てども歸つて来ないので愈大騒動になり、夜が明けると勿々、今度は本物の村の大勢が例の四つ池の堤まで出掛けて来ると、強力強膽も何のことはない、善八はその堤の上に土のやうな色になつてぶツ倒れてゐるので、早速介抱すると漸く息を吹き返した、それから善八は人々に擔がれて自宅へ歸つたがそれ以來ブラブラ病になり其の後一年程すると遂に死んで仕舞つた。

▲お阿岐の方

今は男爵になつてゐる某藩主の先々代に某といふ殿があつた、これだけいへば中には、略想像のつく讀者もあらう、その殿が今の某子爵家からお阿岐の方といふ奥方を迎へられたが、この奥方は頗るの妬き手で、例へば殿様が御用事で直接に女中を呼ばれても忽ち猜疑の目を光らせて、ニユツと二本角が飛出すといふ女である、それがために殿も何時しか奥方に嫌氣がさして、それがツイ交情に現れるので奥方の嫉妬は愈猛烈を加へた、處が其所へ新に上つた女中がこれまでには嘗てない美人で、素性も立派な女であるから、奥方に對して不愉快の心寂しく思つてゐる、殿の胸は忽ち燃えた、御寵愛は日増しに深くなつたと來たから、さらでだに嫉妬てく堪らない奥方がどうしてこれを平氣でるやう筈がない、況してその女中に殿のお手が附いたと聞いてはお阿岐の方は忽ちカツと逆上して仕舞つて、宛ら夜叉の如く夜となく日となく狂ひ廻る亂暴さは到底も正氣の人ではない、殿様も始めの中は可い位に捨て、置いたが愈それが劇しくなるばかりなので、家來共に對しても面目な

く、遂に泳えかねてお阿岐の方を實家へ歸さしめたのである、けれどもお阿岐の方は女子が一旦嫁した限りは死んでも實家へは歸らぬと挺でも動かぬといふ勢ひに殿様もホトホト處置に因つてゐた。

處か或日のこと、殿様はその發狂奥方から、何だか判らないが非常な侮辱を受けられたので、斯くなる上からはもう用捨ならぬ、唯一刀の下に手打にせんと刀おツ取りアワヤ狂亂の奥方は眞二つとならんとする處を、折から次の間に控へてゐた例の御寵愛の女中が飛んで出て、殿様のお袖に縋つたものだから其の場は納まつたが、納まらぬは殿の胸の中、無念の色は眼の光にも見えた、けれども其處は一城の主だけあつて煮え返らんばかりの心を押し鎮め、その儘自分の居間に下つた、とその明くる日である、殿はそつと奥方の部屋を覗いて見ると、お阿岐の方は今しも鏡臺に向つてお粧飾に餘念もない、ウン、今こそ屈竟なりと獨り首肯き、自分の居間へ引返し一刀小脇に搔込み、抜き足差し足、ソつと奥方の後に近寄つたかと思ふとスラ

リと抜き放つた一刀のチラリと鏡に映つたので、奥方は吃驚、ヒヨイと振り返ると、此時己に遅し、殿が右手の二尺八寸は見事に奥方の右の肩から左の脇腹へかけて唯一刀のお袈裟斬り、あはれや流石のお阿岐の方もキヤツといふ微かな一聲を此世の名残りに忽ち其の場に打倒れ、四邊は一面血汐の海となつた。

この物音に驚いて家來共は駈け附けてくると、この光景！家中は忽ち上を下への大騒ぎとなつたがさりとて今更如何とも詮術もない、其處で老臣どもはいろく協議を凝らした揚句、兎に角何れへも極秘密にしてお阿岐の方の亡骸は竊に葬り、一方御寵愛の女中には莫大な涙金をやつて長のお暇となつた、それから殿は獨身でゐられたけれども家來共の勧めや何んかで、間もなく某家から新に奥方を迎へた、この奥方はお阿岐の方とは大違ひの極く嫺やかな婦人であつたその新奥方が興入をされた翌朝のことである、化粧の間で今しも美しいお化粧をしようとして列の鏡に向つたと思ふと、奥方はキヤツと叫んで忽ち其の場に氣絶して仕舞つた。

聲を聞附けて腰元等が駈け附け、醫者よ薬よと手當を加へた甲斐あつて、新奥方はヤツと蘇生はしたものの、それからといふものは、奥方は恐い〜のいひ通してあつたといふのは、例の鏡に向つてヒヨイと見ると、自分とは似ても似附かぬ、黒髪おどろと振亂した満面血だらけのお阿岐の方の羅刹の形相物凄いはかりか、新奥方の面をジーツと噴めてヒ、と氣味の悪い聲で笑つたといふのである、殿様は其様馬鹿なことがあるもんかといふもの、心の中では尠からず驚いた、何しろ非常に秘密にしてあることだから殿様は早速其恐ろしい鏡を打壊して仕舞ひ、百方手を盡して新奥方の機嫌を取るやうにしたが奥方の方では何時しかヒステリーの様な有様になり、遂に新奥方は自分の方から實家へ逃げ歸つて仕舞つたのである、處がこの奥方が逃つて歸つたといふ噂が何處からとなしに家中の評判となつて、それがため奥方に來る者がなく殿様は遂に一生涯身を暮して、六十幾歳を以て他界したが、この殿様には嗣がないので、兄君の次男を入れて世嗣ぎとしたけれども、お阿岐の方の例

の怖ろしい顔が奥方の鏡に映るので、遂にはその化粧の間ひで取り壊つた、するとそれ限りお阿岐の方の血塗れ顔は出なかつたが一方に不思議なことが出來た、それは外でもない、三人出來た子供の中の一人といふのは姫様だが、この姫様が生れ附いての啞者で、可憫さうに折角立派な家に生れながら何處へも縁附くことが出來ず随分悲惨な生涯を送つたのである、これも屹度お阿岐の方の祟りであらうといふので當主になると間もなく、以前の邸宅は悉皆賣拂つて仕舞つて新御殿を建て、其の後は家中何のこともなかつたが、何時とはなしに又茲に怪しいことが出來出したのである、それは斯うであつた。

或夜當主夫婦は何時ものやうに寢床に入つて、夢も圓かな夜半過ぎになると、何だか不意に物音が聞ゆるので、奥方はフツと眼を覺まして見ると風もないのに、寢間の彼方の障子に變な音がするのである、奥方は不審に思ひながら少時ジーツと息を疑らして聞いてみると、音は正しく女の頭髮の毛でも觸つてサラ〜と鳴つてゐる

如くである、愈不思議に思つて奥方がヒヨイと其方の障子を見るとボンヤリと映つた怖しい形相の女の影こそ噂に聞いたお阿岐の方！それが此方を見てヒヒ、と微かな聲に笑つたのだから、流石氣丈の奥方もアレツと叫んで其の儘俯伏しすと殿様を揺り起した、殿様も驚いて目を覺ませると何でもない、寢間も四邊も深い夜が聞としてゐる、それは弱い女心の迷ひだよといつて殿様は笑つて仕舞つたが、何うして翌晩から其の時刻になると例の如く障子はサラ／＼と音して、死神のやうな笑ひ聲は又も奥方をキヤツといはせた、處が殿様がそれに目を覺ますと怪しい音も聲も其の儘絶えて仕舞つた、奥方一人だと屹度現れるのであつた、斯うなると何といつても女のことで奥方は遂に我から離縁を取つて、先々代のそれと同様實家へ歸つて仕舞つた、後へは間もなく新奥方が出來、さうして例のやうな怪しいこともそれ限り見えず、夫婦仲には玉のやうな美しい若様が生まれそれが五歳になると程なく今度は花のやうな姫様が生れ、殿様は一方ならず喜んでゐると丁度其の時分からで

ある、奥方は毎夜夜半頃になると、靜かに寢てゐるのが矢庭に『アレお阿岐さまが……』と殺されるやうな聲を張り上げて七顛八例の苦しみをするので、それも殿様か其の他兎に角男氣が傍に起きてゐると何の事もなく、萬一留守にでもなると忽ち『アレお阿岐さまが……』と來るのである、之がために奥方の産後の衰弱が、見る／＼重い病となり、終了頃は殆ど苦しみ通じて遂に一月ばかり經つとあはれや奥方はいどしい二人の子達を残して果敢なくなつたのである、殿様の悲嘆はいふまでもなく、兎に角生れた姫様は乳母の手に掛けて育て上げると、何の因果か、美しい雛のやうなその姫様は先天的の白痴なのであつた。

其の後殿様は例のお阿岐の方の祟りを怖れてか、家來どもが何といつても奥方は迎へない、さうして未だに寂しい獨身生活をしてゐる、が皆んなこれはお阿岐の方の執念の祟りなのである。

怪

談

揃(終)

大正八年六月十五日印刷
大正八年六月二十日發行

杉化之幽靈怪談

【定價金五十錢】

著者 大文館編輯部

大阪市東區南農人町二丁目

發行者 前田千代藏

大阪市西區阿波座中通二丁目

印刷者 荒木佐兵衛

大阪市西區阿波座中通二丁目

印刷所 井下浩進舍

不許
複製

發行所

大阪市東區和泉町松屋町北入

大文館書店

振替大阪四二五四番

277
991

終

